東北、アートの現在地
震災発、コロナ経由…どこ行き？

「優れたアーティストのユニークな視点と仕事」と、地域の「人材、資源、課題」をつなぐことをコンセプトに、2016年にスタートしたせんだいメディアテークのアートノード事業も、足かけ5年が経過しました。事業開始と同時に、活動内容を広く伝えるとともに、アートが東北の人・資源・課題と接続するためのアクティビティについて、話題提供を行ってきた本誌「JOURNAL」。

本来であれば、東日本大震災から10年を迎えるなかでの今年度事業をお伝えする方針でしたが、コロナ禍のいま、アートノード事業も大小さまざまな軌道修正をしながら手探りでの運営が続いています。本誌編集チームもこの間、定期的な話し合いを重ねてきた結果、東日本大震災から10年を経る東北において、コロナ禍に屈することなく表現し続けるアーティストの取り組みを、しっかりと仙台地域内外へ発信することの重要性に辿り着きました。

そこで今号では、パンデミック以降の動揺や混乱の渦中において、東北各地で開催された現代アートの展覧会について、地域に住まう19名の方々にレビューとして執筆いただきました。いまこれらの表現から垣間見る東北の現在地と、この先を探る手立てとなれば幸いです。

01

宮城

佐竹真紀子個展「波残りの辿り」

レビュアー／細萱航平

佐竹真紀子の個展「波残りの辿り」は、その構成を「《偽バス停》」と「絵画作品」の2つに分けられる。佐竹の名を最初に知らしめたのは《偽バス停》だが、しかし本展の趣意はむしろ近年の絵画作品の展示にあっただろう。希薄に思えた《偽バス停》と絵画作品の繋がりは、本展によって追えるようになった。

節点となる《Seaside Seeds》は青の鮮やかな絵画で、佐竹が現地で見聞きした荒浜の過去・現在・未来の出来事が俯瞰で描かれた物語絵巻と言っても良い。特徴的なのは、そのイメージが幾重にも重ねられた絵具の層を彫刻刀などで彫り込むことで描かれている点である。

復興とともに場所から記憶の手がかりが消えていく中で、佐竹は、江戸時代の荒浜の絵を前にした地元の人々の言葉に、様々な時空の荒浜が現れることを発見した。《Seaside Seeds》は、言中に現れるそのような不可視の荒浜を彫り込んでいる。ゆえに彫る行為を、人々の記憶の中の荒浜を掘り起こす行為の寓意として捉えることもできる。それは、《偽バス停》が人々に荒浜や蒲生の過去の風景を呼び起こすものであったこととも通じている。

しかし佐竹にとって、彫る行為には必ずしも明白な意図があるわけではないという。その証拠に、同じ手法の絵画5点のうち、最も古い《Seaside Seeds》とそれ以降の作品の間には、受ける印象の差がある。誤解を恐れずに言えば、《Seaside Seeds》は「絵」らしくない一方で、それ以降の作品は「絵」らしい。

《Seaside Seeds》が、荒浜の出来事を包括的に配した作品であるのに対し、近作では人々のより個人的な記憶を描こうとする。それは、記号的なイメージでは表せない、不定形の記憶への接近である。近作ではそのことによる「迷い」が制作過程に表れているのかもしれない。すなわち、《Seaside Seeds》では地たる絵具の層に対し、図たる構造物や人々が彫り込まれ、地と図は明確に分かれている。一方で近作ではより個人的な記憶を表すために、彫り込まれる図のイメージは慎重に探され、絵具の層による地も大部分が削られなければならなかった。その試行の繰り返しは地と図の境を無くし、画面はイメージとして一体化する。ゆえに、近作は「絵」らしいのだ。

以上を踏まえれば、本展の構成は《Seaside Seeds》「まで」と「以降」であっても良い。《偽バス停》を通じて佐竹が培った場所と記憶の風景に関する蓄積は、《Seaside Seeds》で一旦の結実をみた。それを超えて佐竹は今、人々が心に抱く記憶そのものへ近づこうとするのである。

佐竹真紀子 個展「波残りの辿り」
2020年11月6日－12月27日
会場：東北リサーチとアートセンター（TRAC）

04

宮城

タノタイガ個展「15min.ポートレート 2008-2020」

レビュアー／門眞 妙

ギャラリー内に設えられた部屋は薄暗く、赤みを帯びた照明が二つ吊り下げられている。入場者は渡された懐中電灯の光を頼りに100点程の小さな写真を見つめ、添えられたテキストを読んでゆく。そこに写るのは、社交街（置屋街）の"旅館"で働く女性たちの衣装を身に付けベッドの上でポーズをとるタノ自身と、"15分の制限"の中で彼女らによって写された作家との応酬の時間。撮影者は作家ではなく、名前も顔も知るよしのない彼女たちだ。こちらを見つめ返す作家の視線に射抜かれながら、仕事部屋の壁紙、貼られたポスター、シーツの模様、脇に置かれた小物や仕事道具、そして作家が身につけた彼女たちの服…に目をやってゆく。

"女性"に求められたフレームを男性である作家が装うことで生まれた皮膚と内臓が反転するような凄まじさ。告発でも揶揄でもなく（そちらへ振り切ることも読み解くことも可能な綿密な構造を作品は持っているが）、それ以前に「男」と「女」がそれぞれの意向と事情で再設定した強固な境界線が融解するただ事ではない渦の中で、私は泣いていた。感染対策のため入場できるのは2名までという制限もまた、作品と鑑賞者の間に奇妙な親密さを育んでいた。

私はこんなにも「誰かの目線になって対象を見つめ」「（写って）いない対象の存在を生々しく感じる」ことを意識したことはなかった。カメラを通し彼女たちの眼になり、そこから内臓一本まで繋がってしまったかのようだった。

想像する。カメラを構えた彼女たちはイレギュラーな時間の中に少なからず楽しさを見つけたのではないか。

懐中電灯や会場にそっと設置された照明に象徴されるように、灯すことについての作品だと私は受け取った。胸の内に在る、外に出すことはない言葉にもならない暗がりに小さく光を当てられ、私は会場を出る頃には弱くあたたかく灯ったものが消えぬよう大事に持ち帰った。おそらくこの展示空間に放り込まれた鑑賞者は各々で異なる体験をする。人によっては、あなただけには秘密を打ち明けてもいいかな、と思わされるような極私的な体験すらするだろう。各々が受け取ったことの共有と一般化は難しいに違いないが、それをそのままとする豊かさに満ちていた。それでも私は、特に男性と、作品を観て感じたことの話がしたくなった。知りたくなった。

私は仕事部屋への入場を待つために置かれた椅子に座り、頭上の赤いライトに照らされながらガラス戸越しに外を眺めた。夜。まばらに通り過ぎる人。まるで"旅館"の内側の人にでもなったかのような錯覚を味わっていると、時間を告げるイチゴの形をした可愛いらしいキッチンタイマーの音が切り裂くように鳴り響き、現実に引き戻された。

彼女たちの顔も、体つきも、声も知らないけれど、そこが懐かしい、愛着のある場所になっていた。展覧会が終わりその場が消えてしまうことを名残惜しく感じるのは初めてだった。

タノタイガ 個展
「15min.ポートレート 2008－2020」
2020年10月15日－31日
会場：Gallery TURNAROUND

05

宮城

多田由美子展「x氏の最後の晩餐」

レビュアー／松崎なつひ

多田由美子は、1999年から作家としてのキャリアを開始した。以後、おもに仙台と東京で発表を続けている。絵画を制作の主軸に据えつつ、テキストやインスタレーション、他の作家とのコラボレーションなど、様々な形式を試みてきた。その背景には、「絵画」とは何かを問い続ける、多田の作家としての姿勢がある。2013年からは、白いテーブルをタブローに見立て、その上に絵具のように日用品を置く「テーブル絵画」と呼ばれるシリーズを手がけている。

《x氏の最後の晩餐》は「テーブル絵画」の最新作で、6mのテーブル上を、さまざまなものたちが埋め尽くす。ほとんどのものがホームセンターや100円ショップなどで入手でき、なにがしかの用途を持った大量生産品だ。製品として規格化された色や形の合間に、石や小豆、植物などの非・人工物も紛れ込む。多田は、それらのものの色、形、大きさ、質感などを記号ととらえ、机上に配置する。

本展のステートメントの中で、多田は、本作を「静物画（Still Life）、すなわち死せる自然」と呼ぶ。物語や用途（意味）を伴わないものの集合としての「テーブル絵画」は、おそらく、描かれたものが幾重にも象徴的な意味をまとったヴァニタスのごとき静物画ではない。むしろセザンヌ、あるいはピカソのそれに連なるだろう。震災やコロナ禍の中で、作ることにためらいを覚える作家や、事態の作品化を試みる作家など、その反応はさまざまだ。多田もその都度、作家としてのあり方を自問し、制作と発表を継続することによって、芸術の存在意義を社会に投げかけてきた。セザンヌ、ピカソらの静物画の探求は、既存の絵画に対する問いであり、同時に、彼らの答えでもあった。「絵画とは何か」を問う上で、「テーブル絵画」は有効で魅力的な装置である。では、多田の答えは、「テーブル絵画」なのだろうか。

2020年3月、多田は川口市アートギャラリー・アトリアで、本展と同名の個展を行った。そこには本展と同じ「テーブル絵画」とともに、《x氏の最後の晩餐の彼方に》と題する一枚のアクリル画が展示されていた。清澄な空気を感じる風景の中に、白い線で小さく「テーブル絵画」の輪郭が描きこまれた作品だ。「テーブル絵画」の彼方に、多田は今、どんな絵画の力を見いだそうとしているのだろう。虚と実のあわいに浮かぶ「テーブル絵画」の白い輪郭線は、私には、多田の作品が新たな段階へと向かう兆しのように見えたのだ。

多田由美子展「x氏の最後の晩餐」
2021年1月12日－17日
会場：SARP 仙台アーティストランプレイス

01／佐竹真紀子個展「波残りの辿り」

02／菊池聡太朗「ウィスマ・クエラ」 提供:菊池聡太朗

03／斉藤文春展―そして、いつか・弐／G青城と私 撮影:伊藤トオル

04／タノタイガ 個展「15min.ポートレート 2008 - 2020」 撮影:小岩 勉

05／多田由美子展「x氏の最後の晩餐」

06／ちばふみ枝 個展「遠い庭」 提供:ちばふみ枝

07／佐々 瞬「公園／ローカルの流儀」 撮影:小岩 勉

02

宮城

かんのさゆり・菊池聡太朗展「風景の練習 Practicing Landscape」より
菊池聡太朗「ウィスマ・クエラ」

レビュアー／志賀理江子

「1984年、カトリック神父であったマングウィジャヤという人は、ウィスマ・クエラと呼ばれる教会をインドネシア、ジョグジャカルタの地に建設した」

約3年前、当時、建築学生であった彼は、「英語の"welcome"に似た意味を持つ"wisma"という名の、増改築を繰り返し続ける、まるで生きているようなその家に」、迷わず向かった。

どうして彼はここに行くことを選んだのだろう。

「誰でも無料で、その人が望めば、住めるんです」……私が彼に、どんな場所かと聞いた時、そう答えてくれたことをよく覚えているが、それは、この現代の日本においては、とんでもなく稀有なことだ。ここが私の故郷だ、と、胸を張って言えるような土地もなく、ここが自分の家だ、と、確信を持って呼べる場所も持たず、ただ今この瞬間、借り住まいのように、ある所に住んでいる。ただそれだけのことを、私も、ずっと繰り返してきた。

地球上の土地は、その殆どがいつの間にか誰かの所有地となった。国家が生まれ、公共圏が生まれた。そんな概念すべてに違和感を感じ続けている。一体、誰が大地を、地面を、自分のものにできよう。だから私はいつまでもこうやって、彷徨い続けている。

しかし、しかしだ。例えば、1冊の本よりも、本屋という空間の方が大事に思え、神や宗教の教えや存在よりも、教会という場の方がはるかに意味深い救いを、人に与える場合がある。何も問われず、ただここにいてもいいのだと、そんな風に、素朴に思わせてくれる、そんな個人的な場所は、今誰もが必要としているように思う。

彼が日本へ帰ってきて3年が経った。彼は、この早い春に、塩竈の丘に立つ小さな美術館で、白い部屋をひとつ使うことが許された。彼は、彼の記憶の中の「ウィスマ・クエラ」を、ここに運び込んでくれた。

記憶は忘却され、しかし反復しながら何度もこの体に蘇ってくる。私たちは、その都度、新しく感じることができると思う。その蘇りの途中にある、不完全で揺らいでいて、とてつもなく断片的な、しかし、強烈に彼から離れないあの場所が、ここに造られたのだなと思った。

彼が真っ赤に塗った、小さな「ウィスマ・クエラ」の建築模型を、顔を近づけて見てほしい。部屋の中に置かれた、いくつもの切り出された塩竈の石に、腰を下ろして座ってみてほしい。

かんのさゆり・菊池聡太朗展
「風景の練習 Practicing Landscape」
2021年2月6日－3月28日
会場：塩竈市杉村惇美術館

03

宮城

斉藤文春展―そして、いつか・弐／G青城と私

レビュアー／阿部沙斗加

書家としての活動をはじめ50余年となる、斉藤文春さんの展覧会を拝見した。

これまでの多岐にわたる活動を網羅的に辿る、ある種現在に至るまでの集大成とも言える展覧会だった。

文春さんは学生時代に書の道を志してから、書の領域を超えて様々な芸術家と出会い、大いに刺激を受ける中で、書にとどまらない独自の表現を一貫して追求して来られた。

作品に表された文字は、それぞれが持つかたちにとらわれることなく、鑑賞者が自由にイメージを広げていけるような柔和な姿をしていて、一人ひとりの多様な視点を迎え入れてくれているような優しさを感じる。また、「水墨抽象」と呼ぶ独自の抽象表現は、ライフワークとして精力的に取り組まれながら、その可能性を追求し続けている。

水墨抽象作品は、和紙や画用紙上に墨による点と線がシンプルに表されている。用具は筆に限らず、竹ひごであれ割り箸であれ試したいものは何でも試し、また、高価な筆にも100円の筆にもそれぞれが持つ良さや味わいを見出しながら、作品ごとの必要に応じて、それぞれの特性に呼応するように用具を選択されている。

そうした日ごろの探求から生み出される作品は、雨粒のように無数に拡散する点や縦方向にすっと引かれた線など、シンプルでありながらも似て非なる作品ごとの表情を湛えている。その限りなくシンプルな、紙と墨による白黒の世界を観ていくうち、点を打つ、線を引くという行為はそもそも、遥か遠い昔から連綿と続く人類の表現の始まりであることを、その延長線上に現代の多様な芸術や我々の日々の暮らしが確かにあることを、思い出させてくれた。

文春さんは「伝える」という人間の根源的な行為そのものについて問い続け、常にその原点に思いを馳せているのだと思った。原点に立ち返ることは、人が前へ進むための、生きるための大切な行動だが、そう容易なことではない。

しかし、幾度となく人間の生活や自然の営みの根本を揺るがす事象に見舞われても、そのたびに文春さんは正面から向き合い、行動して来られた。作品には、時に極限までシンプルで脆く、儚い線となって現れたりと、有機的な作用をもってその時々に作品を発表することと同時に、自身の表現の追求のみならず、昨年の「花と夢・みんなの書の展覧会」（2020年9月8日～13日 塩竈市杉村惇美術館）では、不安が続く中でも心に安らぎや希望を持つことを目的とした、誰でも出品可能な書の公募展の開催に尽力され、子どもから大人まで1000人超の出品者が思い思いに筆を走らせ、みんなで思いをともにする稀有な機会を創出された。

日々、書や先人達への深い敬意を込め、書をしたためる文春さんの願いはまた点と線となって現れ、これからも人と表現を繋いでいくのだと思う。

斉藤文春展―そして、いつか・弐／G青城と私
2020年12月1日－6日
会場：SARP 仙台アーティストランプレイス

06

宮城

ちばふみ枝 個展「遠い庭」

レビュアー／是恒さくら

布のたわみや三つ編みを思わせるやわらかな形には、淡い紫やピンクや黄の彩り。軽やかな木材に彫られたそれらの形は、ふんわりと紐で綴じられて、もし強く触れたなら倒れてしまいそうな、あやうさを纏って立つ。

ちばふみ枝さんの彫刻を、遠のいたり近づいたりしながら眺めていると、小学校のピアノを覆っていたフリンジ付きのカバーや、誰かの家のカーテンを結んでいた紐や、階段の手すりなど、思い出とも呼べないほど断片的な、記憶の隅に眠っていた眺めが呼び覚まされる。

《家族劇場》では、彫刻から覗くように、壁にちばさんの家族写真がかかる。ごく個人的な空間に上り込むような心持ちで、壁と写真と彫刻の間に立つと、不思議な懐かしさを感じる。自分と自分のまわりにある全てのものが、想うだけで「何にだってなれた頃」の感覚かもしれない、と思う。押入れを秘密基地に、のれんやカーテンの向こうを異世界にできた頃。きっと誰もが幼い頃に抱えていた、世界の見方。ちばさんの彫刻は、隔たりではなく、いくつもの並行する世界を作り出すようだ。

石巻市生まれのちばさんは東日本大震災を契機に2011年に石巻へ戻り、2019年から、津波により被災した実家の手入れを再開したという。本個展と同時期に、石巻のキワマリ荘の2Fで彼女が運営するアートスペース「mado-beya」では、ZINEを集めた企画展が開かれた。そこで発表されたちばさんの小冊子『海とカモシカ 01』には、整えられていく実家の様子がおさめられている。津波を受け損傷した砂壁が崩れて一面に広がった木の床を掃くと、集まった砂が小山になる。砂や埃が落とされ、整えられ、しまわれていく服や小物。〈掃除〉より〈発掘〉のような印象を受ける。

東北の各地で、被災した土地を再訪するたび、風景が変化する速さに驚くことがある。急いで片付けられたもの、失われた場所は無数にあっただろう。新しい何かに置き換わり、忘れられてしまったものもあっただろう。捨てるのか、壊すのか、直すのか、それとも、触れずにしまっておくのか。ひとつを選択することが他の方向を閉ざしてしまうこともあるはずだ。もしもどこか知らないところに、並行して時間を積み重ねている場所やものがあるとしたら、どうだろう。それは隠された書庫のように、懐かしい物語を呼び覚ましてくれるかもしれない。ちばさんの作品は、そうした物語を見つけていく、標のようにも思える。

ちばふみ枝 個展「遠い庭」
2020年10月9日－11月29日
会場：GALVANIZE gallery

07

宮城

佐々 瞬「公園／ローカルの流儀」

レビュアー／清水建人

2003年、高校生の佐々は、はじめて川内追廻地区（以下、追廻）を訪れた。立ち退きでまばらになった夕暮れの街並は、恐怖心をともなって脳裏に刻まれたという。その12年後、佐々は、横浜黄金町の再開発事業で、消えゆく追廻についての作品を発表した。言うまでもなく黄金町と追廻は無関係だが、過去を精算しようとする都市政策としては比較しうる。佐々は再開発へのアイロニーを示し、ここに追廻プロジェクトは始まったのである。

現在、追廻には1軒だけ住宅が残っているが、地区全体の公園化工事は着々と進んでいる。無論のこと、黄金町も追廻も、あるいは震災からの復興工事にも絶対的な正解はない。戦後の成長期とは違い、私たちはこの20年間、希望的観測で未来を設計することの不可能性を理解してきた。それでもなお、夢に追い立てられるように何某かの「計画」が立案され進められていく。そして、一定の決定手続きを経て動き出した計画は基本的に止まらない。そのことも私たちは知っている。だからこそ決定に関与することの大切さも知っている。だが佐々は、単純に行政政策を批判しようとしているのではない。すでに数十年がかりで進行している超長期の計画に対して、現時点での正解を示したところでナンセンスである。すでに多くの人が移転している、まだ生活している人もいる、粛々と計画を進めていく人もいる。その人たちを正しさの尺度で測るのも短絡的な暴力でしかないだろう。ゆえに彼が実践していることは、追廻が消えて失われることを前提としたうえでの、記憶する作法や技法の探究である。

この個展では、自分の頭部を型取りして埋める一連の記録映像と、かつての追廻の街が象られた棺型のタイムカプセルを埋める「計画」を展示した。記憶技法の一つとして埋めることの検証をしたとも言える。追廻は場所柄、地中に多くの遺構を抱えている。それらに混じり、戦後の追廻の街並や住人の記憶も何らかの形で地中に残されてもいいのではないか。ただし、実際に物体としてのタイムカプセルを埋めることは、地表に公共彫刻と称したシンボルを打ち建てることに似ていやしないか。不滅のシンボルは果たして記憶装置として有効なのだろうか。展示の最終日に、APETOPE（関本欣哉＋中里広太）とおこなったライブイベントでは、そういった数々の問いや逡巡とともに、埋める「計画」は変更され、佐々は棺をリアカーに乗せて追廻を引き回すことに留めた。映像で中継されたその様子はあたかも葬送だったが、しかし彼は埋めないことで、追廻についての記述の継続を選択したのである。行為を帰結させず感傷に浸るように映るかもしれない。だが、やがて公園となったとき追廻をめぐるナラティブは終局を迎えるのだろうか。そうではないはずだ。モニュメントが永遠でないように公園もまた然りである。そして足下には600世帯分のナラティブが在り続けている。複雑に分裂しねじれた追廻の時空が混交するのは、やがて私たちがそこを歩き、追廻の過去を想起する瞬間だけだろう。そのときに向けて佐々の探究は今後も続けられるに違いない。

佐々 瞬「公園／ローカルの流儀」
2020年12月23日－2021年1月11日
会場：Gallery TURNAROUND

08

青森

いのちの裂け目—布が描き出す近代、青森から

レビュアー／奥脇嵩大

1905年、日露戦争下の満州・黒溝台。青森県佐井村出身の従軍医師・三上剛太郎は包帯所をロシア兵に包囲され、絶体絶命の時を迎えていた。三上は咄嗟に手元の三角巾二枚を縫い合せ、軍用の赤毛布を十字に縫いつけ即席の赤十字旗を拵えた。それを掲げたところ包囲は解かれ、負傷兵数十名の命が救われたという。おそらくここに国際芸術センター青森（ACAC）での展覧会「いのちの裂け目-布が描き出す近代、青森から」を考える基点がある。それは危機の只中に生の活路を見出す、ということ。図像学者のE・パノフスキーが示した透視図法と近代の精神構造の関係を引きつつ、近代と私たちとは透明な織物のように分かちがたく結ばれているとしよう。そこに文化人類学者のJ・クリフォードが「純粋なものが、狂ってゆく」（『文化の窮状』）と唱えたことを考え合せてみる。するとこんな問いが浮上する。近代の狂いの只中で、今も生存の危機にさらされ続ける私たちは、いかなる「いのち」を紡ぎ得るか。布や手仕事にまつわる三作家の仕事を紹介する本展は、近代の技術や制度の綻び（狂い）をもとに、もう一つの近代を露わにする。そこで人は自らを取りまく現実世界との関係を紡ぎなおすことになる。

本稿ではその中から遠藤薫の仕事にふれておこう。昨春の緊急事態宣言前から約4ヶ月青森に滞在した遠藤は、布を細く裂いて織りなおす裂織の技法を用いて花火＝パラシュートを紡ぎ出し、そこに自ら選んだ青森市所蔵の着物、糸巻き、壊れかけの農機具、石の欠片、市内小学校所蔵の山下清の花火の絵までを組み合せて作品《閃光と落下傘》を展開した。彼我を引き裂き・縫い合せ、存在の狂い咲き状態を宙吊りにする圧巻の展示であった。総じて現実をオルターモダンな形で生きなおそうとする本展において、遠藤作品には、広義のビルドゥングスロマン（成長物語）の要素もある。しかし主人公は遠藤一人ではない。その傍らには自ら吐いた糸で布の裂け目を繕い続ける蚕がいた。その背後にはACACのある八甲田山での1902年雪中行軍遭難事件の死者199名（岩手139+宮城46+青森5+山形1+秋田1+東京等7）との火花を散らすような交感があった。ならば遠藤作品は様々な形で青森に集い留まる者たちの存在の証左として、少なくとも彼らとは主体を分有されて然るべきであろう。私はそんな遠藤の、死者と生者をつなぐ直接民主主義的な制作／物語の中に、紡ぎなおされるべき「いのち」の形があることを信じたい。

いのちの裂け目—布が描き出す近代、青森から
2020年5月7日—8月30日
会場：国際芸術センター青森

09

青森

「インター+プレイ」展／レクチャー・パフォーマンス「引力のダンス」

レビュアー／慶野結香

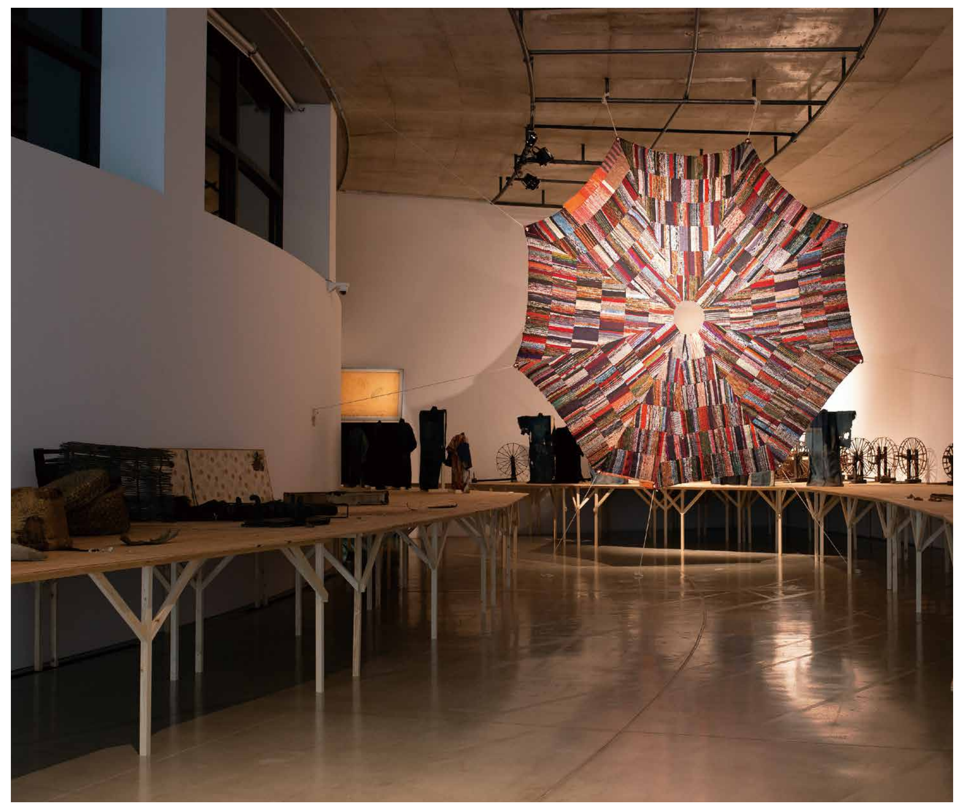
青森県十和田市が行うアートによるまちづくりプロジェクト「Arts Towada」の10周年を記念して、十和田市現代美術館は2020年に「インター+プレイ」と題した企画展を3期に分け通年で開催予定であった。新型コロナウイルス感染症の影響で、本展第1期のオープンは延期、当初3ヶ月を予定していた会期も延長されたことで1年以上同じ作品を見られることとなった。展覧会テーマはその名の通り、アートによって生成する人と人、人とまちのインタープレイ（相互作用、交錯）だろう。野外彫刻、まちなか、そして美術館に配置された作品は、この美術館建築の特徴を活かすように、各展示室に独立して存在し、それぞれのアーティストによる空間へのアプローチが明瞭に見える。

各作品に通底するものとして「引力」を感じた。それはりんごと水紋という記号（鈴木康広）のように目に見える形をとっていたり、本来ありえない空間の出現と宇宙への広がり（目［mé］）や、上下・水平などの空間識を揺さぶるような構成（松原慈）のように派生の仕方は様々だ。ここでは「引力」という言葉を直接用いた、津田道子の企画によるレクチャー・パフォーマンス《引力のダンス》（太田泰博・神村恵・佐々木文美・津田道子、2020年12月26日）のことを考えてみたい。

本展の作品設置を終えてから、津田は緊急事態宣言下の関東に戻らず十和田湖畔に約2ヶ月滞在した。約22万年前からはじまった火山活動により、数回に分けて形成されたカルデラ湖。何度も自然のエネルギーによって動きが生まれ、湖は現在の姿になった。津田が本展に出品した《あなたは、翌日私に会いにそこに戻ってくるでしょう。》も、原型となる作品は2010年にさかのぼり、様々な空間での展開を経て今回のヴァージョンがある。

パフォーマンスはツアー形式で観客も回遊を促されるのだが、展示室内の微細な電子音に耳を傾ける、部屋を湖・廊下を奥入瀬渓流に見立て、決壊当時の濁流のように廊下へ走り出る、湖水の引力で重りが引き寄せられる様子を装置で観測する、光によって内外が重なり合うといった、目の前で繰り出される現象の数々は正直、得体の知れなさを加速させていく。しかし次のようにも思うのだ。地球上にいる限り、地球の質量が邪魔をしてお互いの引力を実感することはできない。ただ、ある場所や物、人に引き寄せられることは感覚として確かに存在する。かつて宗教、哲学と科学が未分化であった時代、目に見えない力やエネルギー、物質の実在は信じられてきた。いまや科学は実証できないものの存在を否定する。それに対抗できる残された最後の手段が、アートによる想像力をある場において共有することなのではないか、と。

「インター + プレイ」展 2020年7月23日—2021年8月29日／レクチャー・パフォーマンス「引力のダンス」2020年12月26日
会場：十和田市現代美術館


08／いのちの裂け目—布が描き出す近代、青森から 提供：青森公立大学 国際芸術センター青森［ACAC］ 撮影：Delphine Parodi

09／「インター + プレイ」展／レクチャー・パフォーマンス「引力のダンス」 提供：十和田市現代美術館 撮影：小山田邦哉

010／岩渕毅弘展 — Translucent Air —

011／是恒さくら+Dylan Thomas「ふたつの水が出会うとき /When two waters meet」
提供：Cyg art gallery

10

岩手

岩渕毅弘展 —Translucent Air—

レビュアー／浅倉 伸

岩渕毅弘は2020年内に3月（東京）・8月（奥州）・12月（盛岡）と三度の個展を実現している。コロナ禍で発表を中止・延期する作家が多い中、驚異的な実行力を放っていた。12月に盛岡のimplexus art galleryで開催された企画展はまさに岩渕の2020年の活動の集約となった。

岩渕は2016年まで油彩を主体とした作風だったが、その後2017年からパネルに紙を張り、木炭の粉末で流動的な表面を定着液で固定させて、人物や光や気象の狭間を揺れ動くような画面構成を展開している。そこからは、岩渕の趣味の冬山登山で得られる視覚のイメージがもたらす真冬を感じ取れる。たとえ真夏の展示であっても、確実に冷気をまとっているのが特徴である。モノクロで繰り広げられる世界は、雪景に似た表層を様式としてフィールド上に拡散域を組成しており、自然に内包される人間・季節・大気すべてが同調した階級となり別個の枠組みを取り払う仕事を成し遂げている。今回は久々の油彩の新作も展示している。

個展タイトルは「半透明な空気」であり、作家によるとこれは「人や自然に対峙したときに対象を明確に認識する少し手前の感覚、半透明のフィルターがかかり不明瞭な状態を描こうとしている」と解説している。これは岩渕作品の表面上に、意図的・人為的ではない自然界の物理的性質が現れるのを否定せず、現れた表面を瞬時に凝固させる作業によって、雪が結晶化するまでの気体〜液体〜固体の相転移の状態の中間的流体力学を認識する行動だと言える。

一連の〈流動的で曖昧な世界の認識を絵画化〉を求める作家の目的意識は、実は全国的に感染者が続出し始めた時期に岩手だけ陽性者ゼロだった頃の県民感覚に近い。他県からの羨望とは相反する疑念が、当時県内には渦巻いていた。その後7月を境に一気に全国レベルの濁流に呑み込まれて行く様は、曖昧から現実への流動の表象化にほかならない。コロナ禍を乗り越えて発表を持続した岩渕のアクションは、県内美術家の代表に相応しい。岩渕の真摯な姿勢は身を以て指導者として、また作家として美術を志す若い世代に範を示し、岩手の美術界を牽引する重要な存在となるだろう。その眼差しは深く、コロナ収束後の遠い未来にまで向けられている。

岩渕毅弘展 —Translucent Air—
2020年11月14日—12月19日
会場：implexus art gallery

11

岩手

是恒さくら+Dylan Thomas「ふたつの水が出会うとき／When two waters meet」

レビュアー／増子博子

「是恒さくら+Dylan Thomas ふたつの水が出会うとき／When two waters meet」は、岩手県盛岡市とカナダのビクトリア市との姉妹都市提携35周年記念事業の一つとしてCyg art gallery（岩手県盛岡市）で開催された。

作家の二人を簡単に紹介する。是恒さくらは広島県出身で、世界各地の生活に密着した〝くじら〟にまつわる日常風景を採集し、その風景を言葉と刺繍で表現する。その活動は、リトルプレス『ありふれたくじら』として発行されている。Dylan Thomasはカナダのビクトリア市の出身で、自身のルーツであるカナダの先住民、コーストサリッシュの伝統的な芸術を継承しつつ、各地の幾何学芸術の伝統に深く影響を受けた新たな伝統芸術を制作している。

今回の展覧会のテーマは〝鮭〟であった。遡河性のその魚は、人々からはいきものというより〝たべものそのもの〟として古くから尊重されてきた。鮭は定期的に大量に現れ、捕獲や調理をする上でサイズも丁度良い。その恩恵は人々にとって奇跡的である、と私は思う。

展示風景は、是恒とDylanとの作品が呼応するようであった。是恒は、日本各地に伝わる鮭の伝承を訪ねるうちに、自身が鮭になる体験を通り抜けたのだろう。その体験は、展示空間の中央に置かれた《変容のための仕立て台》を中心にドローイングや刺繍作品が衛星のように展示され、見るものを人から鮭への変容へと導いていた。仕立て台には縫い針で形作られた鮭の骨格が置かれ、北方地域の人々の〝鮭の骨を川に流すと肉を纏ってまた還ってくる〟という言い伝えを想起させた。鮭の皮で作られた「着物」は、縫合されることで逆に鮭とヒトとに存在する隔たりを思い起こさせた。そして縫い合わされた糸はまた解けていく印象を与えた。運針と、鮭が群れをなして遡上する様子が重なり、私は時間を忘れて魅入った。Dylanは魚の群れや月など自然現象を図案化したプリントを展示した。その作品の前にして私は、全身にトライバルタトゥーが入った男の姿を突然思い出した。民族を象徴する模様を、痛みを伴いつつ自らの皮膚に刻印することは、超自然の力を纏い、手に入れるための儀式ではないか、と思う。作品はからりとしながらもそんな呪術的な力強さが張っていた。

コロナ禍で二人の作家の対面は残念ながら叶わなかった。しかし、作品を通してルーツの異なる二人の身体、別々の土地を流れる水が盛岡で合流したことは、素晴らしい出来事であった。

是恒さくら+Dylan Thomas「ふたつの水が出会うとき／When two waters meet」
2020年10月31日—11月15日
会場：Cyg art gallery

12

秋田

大小島真木「〝起源と対話〟木・火・土・金・水 Origin and dialogue / wood, fire, earth, metal, water」

レビュアー／橋本 誠

画家の仕事はいつの時代でも、「よく見て」「描く」ことだ。そして絵を見せることは、誰かに思いを届けることである。2016年から毎年、大小島真木が秋田県・美郷町で制作活動を行ってきた5つの壁画を中心とした展覧会はそれを強く感じさせる内容だった。

壁画はそれぞれ、町内の小学校・中学校・公民館のために描かれたもので、今回はそれがはじめて一同に会した機会でもあったという。古代中国の「五行思想」を主題としており、例えば水をテーマとした《水の歌》。水を連想させる青をベースとした画面の中に、魚群のように戯れ飛び交う鳥類、珊瑚や海藻に混じるように生える樹木、それを踏み締める動物、魚類や化石のようなものなどが描かれ、生命の循環を感じさせる。添えられたキャプションには「水の音が歌になって響く。鳥たちが集まり、樹々が根を手のように広げ、動物たちが始まりの歌を聴く。」とある。描かれた動物の様は少しファンタジックだ。

美郷町は秋田県南の横手盆地に位置しており、その中心となる六郷地区は湧水の町として知られている。これまでも様々な土地で滞在制作を行なってきた大小島は、この湧水をはじめとする町の様々な環境や人々・生物の営みにもじっくりと向き合い、構想を練って制作に取り組んだに違いない。「よく見て」「描く」間に、見たものをどのように捉え、自らの思考やテーマをいかにして取り入れたのか。時には文字も書き込むなど、緻密につくりあげられた画面を見ているだけでもそれに想像をめぐらせることはできるが、この展覧会は制作前のメモや、作品が設置された小中学生との交流の記録、町の文化財、神話学者・石倉敏明のテキストも紹介され、大小島の描く世界に様々な角度からアプローチすることができる構成となっていた。

それは大小島が4年の間、どのように町と関わりながら制作に取り組んできたのか、その成果に加えて単にプロセスの開示をするということにとどまらず、「あなたは身のまわりの世界をどのように見て、行動するのか」という問いを突きつけられるような体験であった。

大小島真木「〝起源と対話〟木・火・土・金・水 Origin and dialogue / wood, fire, earth, metal, water」
2020年12月19日—2021年1月24日
会場：美郷町学友館

13

秋田

保坂剛志「根と枝（root and details）」

レビュアー／内田聖良

冬眠期のような自粛ムードの中、秋田では淡々と芽を出し葉を広げようとするいくつかの場所がある。秋田市を拠点にする写真家高橋希が自身のスタジオに併設したレジデンス機能を備えたギャラリースペース「点線面」もそのひとつ。本展は、そのプレオープン企画として開催された。

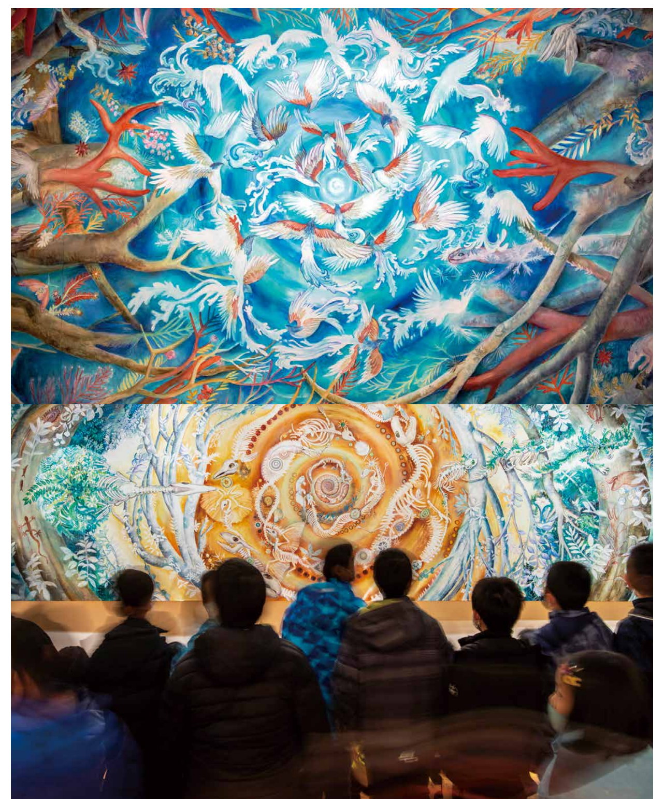
保坂は、布や糸を用いて作品制作を行う「繊維造形作家」で、本展は、動植物の組織や繊維の観察に基づいた作品群で構成されている。動物や植物をモチーフにしたといっても、保坂の観察対象は汗腺や毛穴など、顕微鏡で覗き込むようなミクロな物である。できあがる作品群も、安易に既存の動物や植物と結び付けられる造形はしていない。しかしどこか生命感を感じさせる不思議な形が、細胞のように組み合わされ織りなされている。

これらの大小の造形は、保坂の制作過程の中で発生する「自然淘汰」によって生み出されている。彼は、自然が作り出した造形と「競争」するように、日々、自らの求める強い造形を目指し制作を行う。大きさや造形的な質など、十分に「成長」できると判断されたものは、そのまま成長し展示作品として日の目を見る。一方、魅力はあっても技術的な問題等で大きさ的に成長が見込めないと判断されれば、箱に入れられ、自らの保護者獲得を期待され販売される。保護者を得られた造形物は、細胞分裂を続けさえする（「保坂さん、あのアクセサリーをもう一個作って！」）。

手芸技法による動植物の造形探求という根から保坂が生み出した造形物たちは、工芸として、現代美術として、そして生活雑貨として枝葉を伸ばし、その先にいる人間を味方につけ、各々の生存戦略で現代の流通網をたくましく生き抜いている。たしかに親から子へと愛され引き継がれるものは、人間よりずっと長生きするのかもしれない。造形物が人間を動かすことで成立する、したたかな物の生態系がそこにはあった。

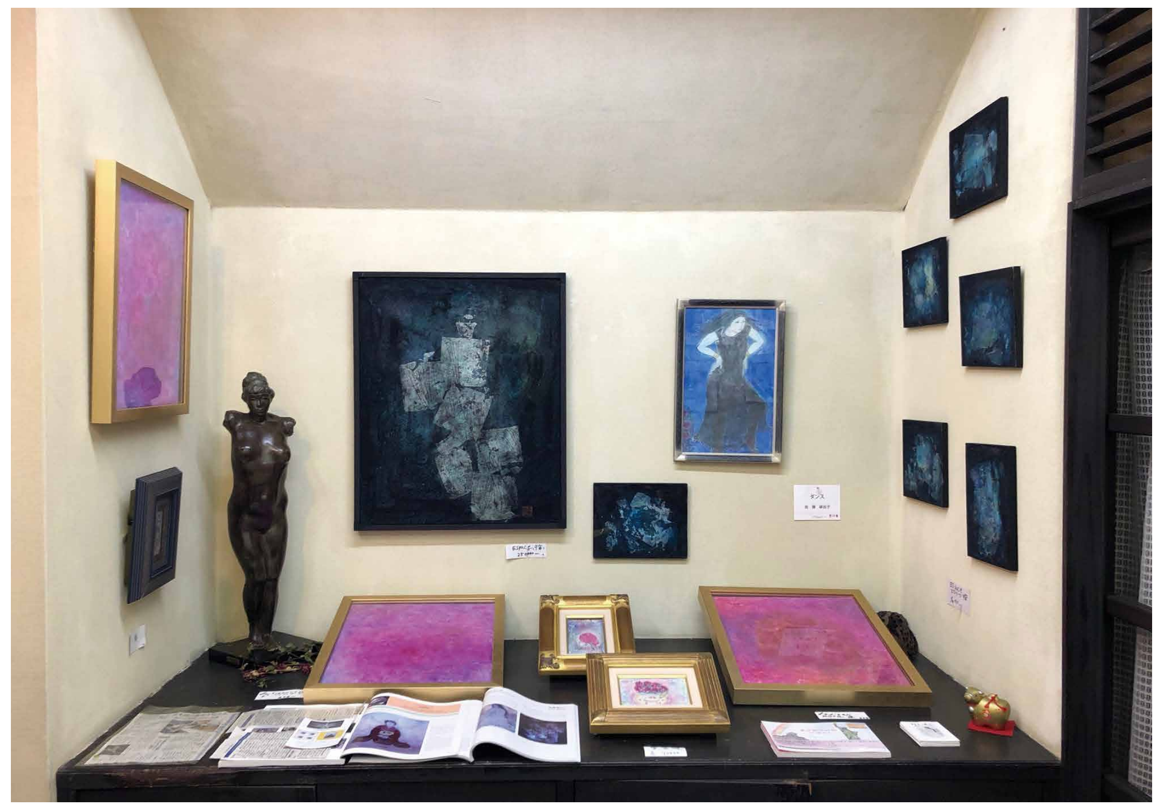
展示の中央には企画者の高橋のアイデアで、来場者が刺繍をするスペースが設けられたり、nost（ovo）が制作した音楽とのコラボレーション等、来場者が長く滞在し接点を作るための工夫がされていた。こうした取り組みの背景には県外との接点をつくり、その点を線や面に繋ぎたいという、地方で子育てしつつ活動する高橋自身の欲求がある。点が線となり面となれば、もしかしたらそれは土地かもしれない。保坂の根と枝とともに、高橋の耕すであろう土地にも、注目してみたい。

保坂剛志「根と枝（root and details）」
2021年1月30日—2月14日
会場：点線面


012／大小島真木「〝起源と対話〟 木・火・土・金・水 Origin and dialogue / wood, fire, earth, metal, water」 撮影：草彅 裕

013／保坂剛志「根と枝（root and details）」 撮影：高橋 希

014／街なかアーツライブMORIOKA「時空をつなぐ現代アート展」での伊藤真理子の展示
提供：特定非営利活動法人 いわてアートサポートセンター


015／馬場彬&佐藤緋呂子展「季節を糾う」

14

岩手

街なかアーツライブMORIOKA「時空をつなぐ現代アート展」

レビュアー／濱淵真弓

コロナ感染者数ゼロが全国一長く続いた岩手県でも、夏からあっという間に感染者増加。遠出を自粛せざるを得ない日々が続く一方、自らや身の周りを改めて見つめ直す時間が生まれた。

そんな中、盛岡の町中で気軽にアートに触れられる機会となったのが「時空をつなぐ現代アート展」。中堅から若手12名の岩手在住・ゆかりの美術家の作品が一堂に会した大規模なグループ展である。本誌に寄稿している浅倉伸はじめ、山本英治、伊藤真理子、鎌田紀子らが新・近作を中心に約40点を展示した。コロナ禍でも地元の作家たちが元気に活動している様子を知り、私自身、純粋にうれしかったし、また、平面、彫刻、インスタレーションとジャンルをまたいで一度にたくさんの作品を楽しめたのもぜいたくだった。

本展のもう一つの主役であり、「時空をつなぐ」の由来が、会場となった明治期の建築だ。浜藤の酒蔵（岩手川）を保存したもりおか町家物語館は、今では貴重な和の展示空間。物語館に展示された浅倉と鎌田の作品は、違和感を与えながらも昔からそこにいたかのように母屋の和室にしっとりと佇んでいたのが印象的だった。

第二会場、旧石井県令邸は昭和に産院や看護学校として使われた洋館。大きな窓から光が差す広間に無数のみくじ箋（?）と絵画を集め見る者を圧倒した伊藤のインスタレーション、県令邸のかつての看護学校時代とコロナ禍の今を重ね合わせたかのような山本のインスタレーションなど、見ごたえたっぷりで、作品と場が重なることで生まれる大きなエネルギーを体感できた。

特筆すべきは、長内努、小笠原卓雄、浅倉という3人の現役作家による、彼らならではの作家選定で、「意欲的かつ展示空間に合わせた表現ができる」作家を選んだとのこと。そうして3人が選んだ作家たちに出品を打診したところ、みんなすぐさま快諾し、さらに秋にみんなが集まって自作の展示場所を決めた際も、もめることなくすんなり決まったそう。私は「さすが、岩手の美術の現場！」と感じたのだが、この、作家同志の連携のよさと、自らの展示場所の見極めこそが、作品と場の素晴らしいコラボレーションを生み出したのだと思う。

人や物とのつながりが物理的に希薄になりつつあるこのご時世で、時間と場所、場所と作家、作家と鑑賞者、また作家同志をつなげた本展。日々の緊張を束の間忘れさせるアートが身近にあることに素直に感謝した、うれしい展覧会だった。

街なかアーツライブMORIOKA「時空をつなぐ現代アート展」
2021年1月20日—31日
会場：もりおか町家物語館 母屋・浜藤ホール／旧石井県令邸

15

秋田

馬場彬&佐藤緋呂子展「季節を糾う」

レビュアー／後藤 仁

秋田駅から徒歩10分弱、モンパルナス通りと呼ばれる小路の、更に奥まった場所に「響画廊（ひびきがろう）」はある。その通りに置かれている看板には、「占」「開運」の文字も付いている。初見では少々戸惑う人がいるかもしれないが、ここは1984年に開設された、れっきとした老舗の画廊だ。

今回、秋田出身の日本画家、佐藤緋呂子（1937—）が展覧会を開催しているという情報を目にしたので訪れてみたら「馬場彬&佐藤緋呂子展『季節を糾う』」という二人展だった。人が3〜4人も入ったら〝密〟になりそうなくらいの空間に、所狭しと二人の作品が掛けられていた。壁の前に置かれた黒い台には新聞の記事や図録などが作品と共にびっしりと置かれ、情報量の多さに一瞬立ち尽くす。だが、伝えたい見せたいという店主の熱意があるからか不思議と居心地は悪くない。

もうひとりの画家、馬場彬（1932—2000）については割愛するが、晩年秋田ですごした同氏の展覧会が近くの「秋田市立千秋美術館」でも開催されており、そちらと合わせて作家の世界に触れられるようになっている。

さて、画廊の一角に高密度に配置された佐藤緋呂子の作品に目をやる。よくモチーフとして描かれる女性像は、その着衣や色味や構図が異なっていても、すぐに当人の作品と分かる。意思の強そうな眼差し、厳しさと優しさ、儚さを内包した女性像は、それ自体、一貫した佐藤緋呂子の世界観である。

女性像に限らず、佐藤緋呂子の絵の世界はうごめいている。霧のように漂う背景、ゆらゆらと揺らめいている輪郭は、彼女のスケッチを見ると納得がいくかもしれない。いわゆるクロッキーなどで良しとされる、線で形をとらえるそれとは違い、線が小刻みに描かれたそれは、形状より印象を描き留めようとしているかのようだ。今回の展示で印象的な新作《ラビアンローズ》というピンク色の絵画も、まるで焚き火の炎を見続けられるかのように、ずっとうごめいて感じられる。

どちらかというと〝死〟やネガティブな感情が感じられていたこれまでの作品ではあったが、生命の炎のような薔薇をモチーフとした〝生〟を感じる作品は、昨今のコロナ禍が少なからず影響を与えたのかもしれない。だが、作家の制作の眼差しはこれからも自身の内面に向けられ、このまま〝捉えられないもの〟を捉えられないまま、描き続けていくのだろうと思わされた。

馬場彬&佐藤緋呂子展「季節を糾う」
2021年1月6日—3月31日
会場：響画廊

16 福島

蔵のまちアートぶらり〜「久松知子・根本裕子展」

レビュアー／大政 愛

いまだに「どうしても」という仕事以外では、福島県外に出ることなく県内で粛々と暮らしている。それは、この展覧会をみた10月時点でもそうだし、この原稿を書かせていただいている2月時点でも変わらない。なので、自分が住んでいる場所の近くで展覧会が開催されるのはとても嬉しくて、ありがたい。

ギャラリーつじるしは、このときが初訪問。まちなかの衣料品店内に、ギャラリーが併設されている形である。私が伺った会期初日には、作者のお二人も会場に滞在されていた。のれんをくぐって中に入ると、オーナーの遠藤さんが、展示を見るよりも先に「どうぞどうぞ」と奥に招いてコーヒーを出してくださった。とてもエネルギッシュで素敵な方で、ご自身が持つ久松さんの作品の話や、日常的に使われている根本さんの食器の話など、いろいろなおしゃべりをした。作者のお二人は東北芸術工科大学の出身で、久松さんは喜多方との縁が深く様々な活動を展開されており、根本さんは福島県須賀川市を拠点に活動をされている。

今回の二人展では、久松さんは《三百円絵画》というB5サイズの680枚の作品を展示、根本さんは山賊たちが山にこもり、生活をする為の道具を作り出していくことをイメージしてつくられた《SANZOKU》シリーズを展示されていた。久松さんも根本さんも、今回は「日常のなかで使う」ためのアートという趣旨があった。多くの作品が購入可能で、久松さんの作品はその名の通り、どれも三百円で購入可能だ。私が作品を見ている間にも、「これ、本当に三百円でいいの?」と、ふらっと来たおじさんが数分の間にトラが描かれた絵を買って帰った。その様子を久松さんや根本さんは「野菜を買って帰るようだね」と表現した。そんな風景だった。

実はその日、私はいつもより多めに財布に現金を入れてきていた。自分も、なにかお二人の作品を身近に感じながら生活がしたかった。だが、いざ購入しようと思うととても悩む。自分にとって「いいな」「飾りたい」「使いたい」と思うものは、それぞれ少しずつ異なるのだ。結局、2時間ほどかけて作品を選び、購入した。

約10日間と短い会期の展覧会だったが、喜多方のまちのなかのギャラリーで、主に近隣の方がお二人の作品と出会い、選び、一人ひとりの日常の一部になっていく。「コロナ禍」と呼ばれる非日常がすでに日常になった昨今、そんな小さな営みが生まれた展覧会がとても愛おしかった。

蔵のまちアートぶらり〜「久松知子・根本裕子展」
2020年10月9日—18日
会場：ギャラリーつじるし（つじるし衣料品店内）

17 福島

ルイジトコトナリー 類似と異なり

レビュアー／川合南菜子

新型コロナウイルスの感染予防のため、マスクで顔を覆い隠す日々。一方で、オンラインのビデオチャットでは顔に焦点が当てられ、顔へ意識を向ける事が多くなった。そのような中で、2020年7月11日〜10月11日に福島県猪苗代町にあるはじまりの美術館では「ルイジトコトナリー類似と異なり」を開催した。9組の作家による、「顔」に関する作品が会場に並んだ。展示作品は写真やイラストレーションといった平面作品から立体作品、参加型の作品と様々である。

私は絵を描く人間だ。人をよく描く。普段の生活で見かける人の顔の造形や何気無い表情などを見て、しめしめと思いながら観察し、ゆるいタッチでノートに描きためている。そういったこともあり、この展示を見る際も、作品に表れている顔の造形や表情に自ずと目が引かれていった。その中でも印象に残ったのが、2名の作家だ。

1人目は駒嶺ちひろ。《Shape of men》というシリーズで、誰かに使われていたぬいぐるみを縫い合わせ、人のような形にした立体作品と、その立体作品を肖像画にした作品を制作している。素材のぬいぐるみは有名なキャラクターなどを用いているが、糸によって縫われ、デフォルメ化されたそれは、素材のキャラクターのイメージを逸脱し、誰かに使われていた時のぬいぐるみそのものの人格が宿っているように見えた。肖像画は縫い合わせによって形成されたぬいぐるみの顔の造形やしわの表情がより克明に見える。その表情によってぬいぐるみのキャラクター性に埋もれて見えなかった、人としての意思や感情を強く感じる作品である。

2人目はとんぼせんせい。とんぼせんせいは3本線で構成される顔をアイコンとし、作品を制作しているが、今回出展していた作品は、女の子や動物などを描いたイラストレーション、バンクシーの作品などのオマージュ作品が並んでいた。3本線の、にんまりとした表情でこちらを見つめる姿は可愛らしく印象的だが、全く同じ表情をした作品たちを見つめていると、この少女や動物達は、自らの意思で微笑んでいるのだろうか、そうでないとすれば、彼女達の意識はどこにあるのだろう、どこか不安を覚える。駒嶺の作品とは対照的に、表情がその人の意思や人格を覆い隠しているようである。

他者に感情を訴える力と、覆い隠す力がある顔の表情。たとえ似ている表情であったとしても、感情は全く異なるものかもしれない。そう考えると、顔の表情だけでコミュニケーションをとることは困難だ。だから人間は言葉も用いた複合的なコミュニケーションをとるようになったのかもしれない。

作品を鑑賞し、思考を巡らせる旅は、人のコミュニケーションのあり方、表情と言葉のバランスの重要性に辿り着いた。今までの自分はどうだっただろうか。少し、後ろを振り返り、立ち止まる。

ルイジトコトナリー類似と異なり
2020年7月11日—10月11日
会場：はじまりの美術館

018／第14回灯籠絵展示会「ひじおりの灯」

019／テヲ フル〓〓ワシテ カイテユク／赤塚豊子と華雪 展

017／ルイジトコトナリー類似と異なり　提供:はじまりの美術館、撮影:佐久間正人

016／蔵のまちアートぶらり〜「久松知子・根本裕子展」

18 山形

第14回灯籠絵展示会「ひじおりの灯」

レビュアー／鈴木淑子

たとえ、緊急事態宣言が長引き、温泉街に鑑賞者がいない状況であっても灯籠は灯されていたのではないか。夏の夜、誰にも見られずひそかに揺れ、湯治場のすがたを映し出す灯籠を見てそんな感情を抱いた。

山形県大蔵村肘折温泉が主催する「ひじおりの灯」では、毎年、山形・東北で表現活動を続ける若手作家らを温泉街に迎え、フィールドワークやリサーチを経て、湯治場に息づくさまざまな情景を八角の灯籠に仕立てている。東北芸術工科大学が地区と一緒に立ち上げたこのプロジェクトも、開催10年を機に運営主体を大学から地区に移し、現在は地区と卒業生らが中心となり続けられてきた。新型コロナが世の中を騒がし始めた春先は、例年であれば参加作家を迎え夏の点灯に向け作品制作がスタートする時期だったが、まもなく大蔵村内でも感染が確認され、夏に行われるはずの地区の祭も中止に。感染拡大防止のために旅館や商店が休業する期間もあり、開催か否か、どんなかたちであれば実施可能かなど、地区と作家がオンラインで話し合いを重ね、それぞれの場所から模索する日々が続いた。開催に向けて大きく舵をとることができたのは、地区から聞こえた「作家の皆さんを迎えて、あかりを灯すことを選びたい」という声だった。緊急事態宣言が明け、湯治客の受け入れを再開したこと。そして湯治場として人々を迎え入れる肘折の土地性そのものが、移動と留まること、他者との接触を分断せずにいてくれたことも後押しとなり、現地取材の方法や開催時期などかたちを変えながらも、芸工大の卒業生を中心に山形・宮城・岩手・秋田から参加した作家13名が新たに灯籠作品を発表。振り返るとこうして手探りのなかで重ねた取り組みは新型コロナに抗したものだけでなく、プロジェクトの在り方や灯を灯すことの意味を改めて浮かび上がらせた。

「灯」は辺りを照らすが、そのともしびは遠くにいても見つけることができる。「ひじおりの灯」を灯すことは、いまここに人がいて暮らしていること、そしてこの状況下でも表現をやめない作家たちがいて、迎え入れる場所を閉じないことのあかりでもあった。まもなく15年目の点灯に向けた準備がはじまる。正解のない一年を経て、様々な変化を迎えながらも灯を灯すことをやめなかったこれまでが、来る夏を照らしてくれるように思う。どこかではなくいまここに、「ひじおりの灯」は灯っている。

第14回灯籠絵展示会「ひじおりの灯」
2020年8月8日—23日／9月12日—10月11日
会場：肘折温泉温泉街

19 山形

テヲフル〓〓ワシテ カイテユク／赤塚豊子と華雪展

レビュアー／松葉 里江子

現代書家・華雪（1975〜京都生）が故・赤塚豊子（1947〜1972山形）の詩を再制作した、現代書と映像によるインスタレーション。まなびあテラス芸術監督・宮本武典による企画。

赤塚豊子は1歳で小児麻痺を患い、25歳で亡くなるまでほとんど体を動かすことができなかったという。聡明な少女で、祖父に字を教わり、指一本で文字を打つことができるタイプライターを使って66篇の詩を書いた。死後、詩集が出版されたが、タイプライターによる原文であるから初版はすべてカタカナ表記であった。展覧会タイトルは、その原文から引用したもの。

文学作品の展示というと、遺稿や書籍を中心に代表作をたどることが多い。これに対し、今回は、自由な現代書の表現力を借りて、文学的内容もさることながら、造形的にも赤塚の詩を再評価しようとした点が特徴的だった。

とりわけ印象的だったのが《テガミ》という作品。壁一面に、半紙が貼り付けてある。およそ300枚。1枚にカナ一文字。読みつなぐと、赤塚の詩「テガミ」の全文になる。奥には、華雪が筆を握りしめ、一文字ひともじ、書いてゆく姿が映像で映し出されていた。

不自由な体で、一篇の詩を綴るのに半月かかったという豊子。どれほどの体の痛みを伴って、この一文字は打ち出されたのだろうか。制作前、華雪は、詩人・研究者の高沢マキの案内のもと豊子ゆかりの地を訪ね、詩集を読み、3篇を選んで作品化した。豊子を想いながら筆を運ぶ書家の姿から、壁一面の半紙から、一文字が受肉する重みがにじみ出ていた。

ウイルス感染拡大に伴い、書家も企画者も山形へ行けず、展示作業はリモート指示で。初日の公開制作も中止となった。4部構成のうち壁一枚が空いた。

そこで華雪は、メイルアートという手法に切り替える。詩人の生家に近い雨呼山（あまよばりやま）。会期中、この雨呼山の稜線や「山」の字を書き、東根に送り続けた。4日に一度、壁面に、山の象形と書家の硬筆による手記が貼り足されていった。便せん1枚に、書家の日常が綴られていたり、かつて豊子も窓辺から彼の山を眺めていたはず、と書きつけてあったり。このメイルアートは、東京から山形への手紙であり、生ける者から亡き詩人への手紙でもあり、作家から観者への手紙とも受け取れた。少しずつ増えていく作品を見るのを楽しみに、幾度か足を運ぶ人もいた。

震災の時と違って、感染症は、だれの通信手段をも絶ってはいないし、むしろ新しい交信のかたちも生まれている。そんな時代にあってなお、華雪は丹念に豊子のことばに形を与え、提示した。原始的ですらあるその手作業の集積に囲まれた空間で、私たちは気づかされる。

この一年で生活様式が変わった私たちと、病身で創作活動に向かった豊子。見えない病で変わらざるを得なかった点において、両者になんら違いはないと。そして、見えないものを人は恐れるけれど、人のしなやかさもまた、いつの世もあるのだ、ということにも。

テヲ フル〓〓ワシテ カイテユク／赤塚豊子と華雪 展
2020年9月12日—11月8日
会場：東根市公益文化施設まなびあテラス

JOURNAL | art node artnode.smt.jp

アートノード ジャーナル 8号 2021年03月31日 発行
編集長｜甲斐賢治（せんだいメディアテーク）
編集｜田中千秋、川満ニキアン、江刺陽名子（せんだいメディアテーク）／長内綾子（communa）
アートディレクション・デザイン｜homesickdesign
印刷｜株式会社文展美術印刷

お問い合わせ・企画・発行
せんだいメディアテーク（公益財団法人 仙台市市民文化事業団）
〒980-0821 宮城県仙台市青葉区春日町2-1／TEL: 022-713-4483
E-mail: artnode@smt.city.sendai.jp／URL: https://www.smt.jp

アートノードとは、「優れたアーティストのユニークな視点と仕事」に多くの人が関わり、熱のある「アートの現場」を仙台に創出する事業です。

本紙ジャーナルは、アートノードの進捗を広く伝えるとともに、アートが東北の人・資源・課題と接続するための話題提供を行います。

※「アートノード」は「せんだい・アート・ノード・プロジェクト」の略称です。

せんだいメディアテーク
sendai mediatheque

© 2021 sendai mediatheque All Rights Reserved. 本紙記事・写真・イラストの無断転載を禁じます
この用紙はリサイクルできます。

せんだいメディアテーク クロノロジー 2001—2021

せんだいメディアテークは2021年に20歳となりました。
これまでの歩みを「クロノロジー（年表）」と、記録映像や発行書籍などと共にご紹介します。

会期：2022年3月まで（予定）9:00-20:00
会場：せんだいメディアテーク 7f
＊ 開館時間は変更する場合がありますので、詳細はお問い合わせください

20
01
20
21
せんだいメディアテーク
クロノロジー 2001—2021

せんだい メディアテーク・オンライン

せんだいメディアテークが制作、所蔵する映像音響資料をオンラインで公開。トークイベントや展覧会などの記録や市民協働による活動の成果をまとめた「smt コレクション」の一部を紹介しています。

#smtcollection

おうちで雑がみ部

紙袋に、紙箱、包装紙、何かに使えそうで捨てるにはもったいない!そんなおうちにある「雑がみ」を活かして、遊んでみませんか?ワケあり雑がみ部がオンライン展開、ぜひご参加ください。

寄稿者略歴

▼細萱航平（ほそがや・こうへい）
1992年長野県生まれ。彫刻家。近年は特に災害におけるモニュメントについて研究する。キュレーションを行った展示に「災禍とモノと物語り展」（広島市立大学芸術資料館、2019年）。個展に「うつる／やどる」（中本誠司現代美術館、2021年）など。2020年4月より宮城県美術館教育普及部技師。

▼志賀理江子（しが・りえこ）
1980年愛知県生まれ、2008年より宮城県在住。2007年文化庁新進芸術家海外研修にてロンドン滞在。主な個展に「志賀理江子 螺旋海岸」（せんだいメディアテーク、2012年）、「志賀理江子 ブラインドデート」（丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、2017年）、「ヒューマン・スプリング」（東京都写真美術館、2019年）がある。

▼阿部沙斗加（あべ・さとか）
1987年宮城県塩竈市生まれ。2010年宮城学院女子大学芸学部人間文化学科卒業。2014年より塩竈市杉村惇美術館学芸員。主に「若手アーティスト支援プログラムVoyage」などの企画事業や教育普及事業を担当。

▼門眞妙（もんま・たえ）
画家。仙台出身在住。東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒業。近年の主な展覧会に「めがねと旅する美術展」（青森県立美術館、島根県立石見美術館、静岡県立美術館、2018年）、「swimming」（Gallery TURNAROUND、2020年）、「故郷」（新宿眼科画廊、2021年）など。

▼松崎なつひ（まつざき・なつひ）
宮城県美術館学芸員。1985年滋賀県生まれの富山県育ち。2010年北海道大学文学研究科大学院思想文化学専攻芸術学講座修了。大岡信ことば館（静岡県三島市・2017年閉館）勤務を経て、2013年より現職。

▼是恒さくら（これつね・さくら）
1986年広島県生まれ。2010年アラスカ大学フェアバンクス校卒業。2017年東北芸術工科大学大学院修士課程地域デザイン研究領域修了。日本の東北地方や北米各地の捕鯨、漁労、海の民俗文化を尋ね、リトルプレスや刺繍、造形作品として発表する。リトルプレス『ありふれたくじら』主宰（Vol.1〜6既刊）。

▼清水建人（しみず・けんと）
1976年生まれ。せんだいメディアテーク学芸員。近年の主な企画展に、「志賀理江子 螺旋海岸」（2012年）、「記録と想起・イメージの家を歩く」（2014年）、「物語りのかたち」（2015年）、「コンニチハ技術トシテノ美術」（2017年）、「ヒスロム 仮設するヒト」（2018年）、「青野文昭 ものの、ねむり、越路山、こえ」（2019年）など。

▼奥脇嵩大（おくわき・たかひろ）
1986年さいたま市生まれ。青森県立美術館学芸員。生きることから芸術の可能性を広げることに関心をもつ。主な展覧会キュレーションに「ここから 何処かへ 國府理」（京都芸術センター、2012年）、「青森EARTH2016：根と路」、「青森EARTH2019：いのち耕す場所 —農業がひらくアートの未来」（共に青森県立美術館）等。

▼慶野結香（けいの・ゆか）
1989年生まれ、神奈川県出身。青森公立大学 国際芸術センター青森［ACAC］学芸員。秋田公立美術大学、サモア国立博物館を経て、2019年より現職。主な企画に岩井優「習慣のとりこ—踊り、食べ、排便する。／見つめ、再生、指しゃぶり」（秋田公立美術大学、2015—2016年）、「いのちの裂け目—布が描き出す近代、青森から」（ACAC、2020年）など。

▼浅倉伸（あさくら・しん）
1971年岩手県盛岡市生まれ。早稲田大学社会科学部卒。布に油性マーカーでドローイングした「クッショニア」作品を制作。2008年岩手県美術選奨受賞。近年の個展に「滅びない第七部」（彩画堂S-SPACE、2020年）、「N.E.blood 21：vol.71 浅倉伸展」（リアス・アーク美術館、2019年）。

▼増子博子（ますこ・ひろこ）
宮城県生まれ、岩手県在住／美術家。盆栽をテーマにした作品や、日々のドローイング「側の器」、自身が暮らす土地で出会ったもの、人に影響を受け、制作を続けている。Gallery MoMo（東京）、Cyg（盛岡）、リアスアーク美術館（宮城）などで個展。［VOCA2018］（上野の森美術館）、山形ビエンナーレなどグループ展にも多数参加。

▼橋本誠（はしもと・まこと）
美術館・ギャラリーだけではない場で生まれる芸術文化活動を推進するアートプロデューサー。東京都内の地域に根差した芸術文化活動を中間支援する東京文化発信プロジェクト室（現・アーツカウンシル東京）を経て、2014年に一般社団法人ノマドプロダクションを設立。2020年よりNPO法人アーツセンターあきたディレクター。

▼内田聖良（うちだ・せいら）
作家。余白書店店長。見慣れた風景の「余白」の部分をテーマに作品制作やプロジェクト運営を行う。インターネット上のサービスも風景の一部として度々作品に取り込む。現代の民話のあり方を探る《バーチャル浜》、書き込み等がついた古書を、読者が製作した「一点物の価値ある本」と再定義し流通させる《余白書店》運営。

▼濱渕真弓（はまぶち・まゆみ）
愛知県生まれ。岩手県立美術館学芸員。大阪芸術大学大学院博士課程前期修了。1997年より岩手県教育委員会事務局勤務、2001年より現職。主な担当展覧会に、「揺らぐ体空—菅木志雄インスタレーション—」（2005年）、「三沢厚彦 ANIMALS 2014 in 岩手」など。

▼後藤仁（ごとう・ひとし）
秋田生まれ秋田育ち。秋田公立美術工芸短期大学一期生（秋田公立美術大学の前身）。秋田市にあるギャラリー「ココラボラトリー」2代目代表、兼デザイナーとしてギャラリーを運営。自身の作家活動のほか、イベント企画、ダンス公演への出演、舞台美術制作等、活動は多岐に渡る。

▼大政愛（おおまさ・あい）
社会福祉法人安積愛育園はじまりの美術館学芸員。1991年愛媛県生まれ。2016年東京藝術大学大学院美術研究科修士課程修了。2016年より現職。これまで企画した展覧会に「あなたが感じていることと、わたしが感じていることは、ちがうかもしれない」（2017年）「えらぶん：のこすん：つなげるん」（2018年）など。

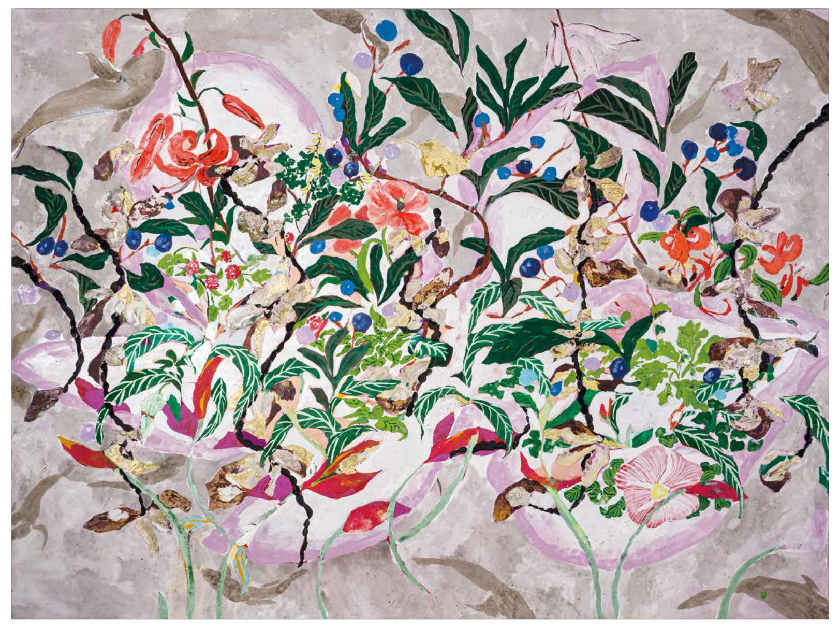
▼川合南菜子（かわい・ななこ）
1996年生まれ、茨城県出身。作家。2018年東北芸術工科大学芸術学部美術科日本画コースを卒業。福島県喜多方市を拠点とし、人々の生活の営みをテーマに制作している。主な展示は「現代東京百景展」（新宿伊勢丹、2018年）、「TUAD ART LINKS 2020 阿久津真那・川合南菜子二人展」（耀画廊、2020年）。

▼鈴木淑子（すずき・しゅくこ）
1989年生まれ。大学で美術作品や文化財の保存修復を学んだのち、文化施設や大学事務局勤務を経て、現在は宮城を拠点に印刷物やウェブサイトの執筆・編集に携わっている。

▼松葉里江子（まつば・りえこ）
まなびあテラス総括マネージャー／学芸員／宮城学院女子大学非常勤講師。2001年より仙台市スポーツ文化事業伊語通訳、2003年から札幌芸術の森美術館、北海道立近代美術館、せんだいメディアテークを経て2016年より現職。「ネオテニー・ジャパン 高橋コレクション展」「澁澤龍彦幻想美術館」、札幌市こども芸術鑑賞プログラム「ハロー！ミュージアム」、ヴェネツィア・ビエンナーレ（2007年）等、国内外の美術展制作現場に携わる。

JOURNAL GALLERY

毎号アーティストをピックアップしてご紹介します



「庭の球茎から島をなぞる」 2021／木製パネル、和紙、油彩、岩絵具、水干絵具／1303×970mm

地域に自生する植物や、東北に伝わる食文化のリサーチを経て絵画の制作に取り組む作家。本作は、幼少期から幾度となく訪れている松島湾に浮かぶ浦戸諸島にフォーカスした新作で、オニユリや浜昼顔、タブノキといった島に生息する植物と、養殖の牡蠣ロープや魚が絡まり合い、イヌサフランのピンクの花弁のなかに、自然の豊穣と複雑さが包み込まれているかのようです。
※2021年3月27日（土）〜4月25日（日）までビルド・スペース（塩竈）で開催の個展で本作を展示予定。

浅野友理子（あさの・ゆりこ）

1990年宮城県生まれ。東北芸術工科大学大学院修士課程芸術文化専攻洋画研究領域修了。食文化や植物の利用について尋ね歩き、記録するように描いている。2020年塩竈市のビルドスペースにて個展「植物をしたためる」を開催。2020年「山形ビエンナーレ」、2019年青森県立美術館「青森EARTH2019」に参加。2020年「VOCA展2020」大原美術館賞受賞。